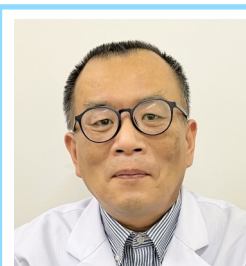


地域連携だより

最新技術を詰め込んだ最新鋭64列マルチスライスCTのご紹介

記念すべき『100号』を担当させていただきます、放射線科・金森修一です。私は2000年から20年間当院の非常勤を務め、2年前から常勤となりました。赴任後からのコロナ禍は想定外でしたが、皆様のお陰で2年間経過しました。各科からのコンサルトや研修医の指導など多忙な業務を担当しております。

今号では最近更新したCT装置SOMATOMgo.Top（SIEMENS社製）の活用法を報告します。振り返ると当院で旧機種CTの導入時にも非常勤で在職しており、当院では3代目のCTとなります。



放射線科 部長
金森 修一

放射線科医が薦める新しいX線CT撮影装置の活用法

CTは現在の医療には必須の医療機器で、特に当院のような救急病院では安定した稼働が常に求められます。CTなくしては救急の受け入れや日常診療はできません。当院では旧機種を長年使用しておりましたが、経年劣化による故障増加や修理部品の枯渇化などから新機種更新に至りました。

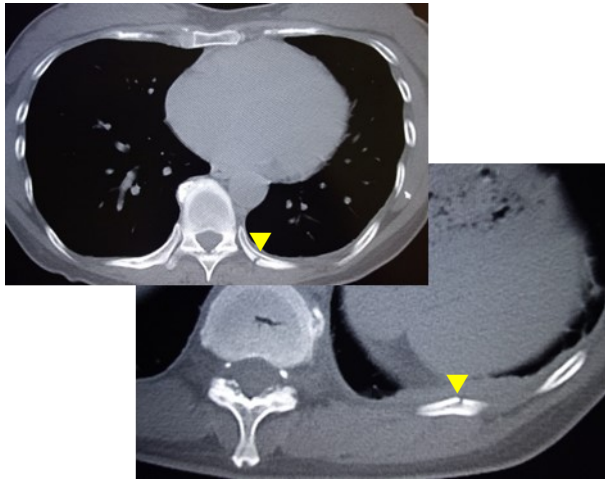
新機種の特徴は多機能な高画質化と被曝軽減（低線量化）の両立です。なかでもAIを駆使した新たな画像処理機能の搭載には驚かされます。微細病変まで同定しやすい、ハイコントラストの高画質画像に進化しました。昨今、放射線を使用した画像診断の増加に伴い被曝線量の増加が危惧されています。低線量化は画質との兼ね合いもあり一概には言えませんが、被曝軽減を優先した肺癌検診/人間ドックで普及してきました。X線検出器や撮像技術の向上も低線量化に貢献し、造影CTでは低線量撮像により造影効果の強調が期待される症例もあり、今後は造影CTにも症例を選択し低線量撮像を活用する予定です。

－新機能「パラレル肋骨レンジ」について－

今回は新たに搭載された画像処理機能を報告します。正式名称は『パラレル肋骨レンジ』ですが私は簡略化して『肋骨展開』と呼んでいます。全肋骨を一画面に表示し、自動的にラベリング標示も付記される機能で、肋骨病変の評価・検索に有効です。

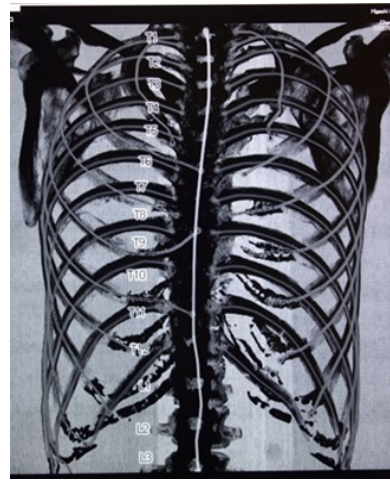
実際の画像は裏ページでご紹介しております。

<画像1 通常のCT像>



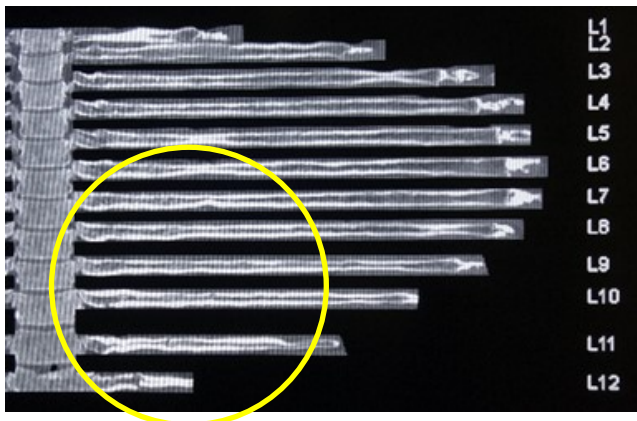
正確に肋骨骨折を評価するには多数の画像を読影する必要があり、かなり煩雑です。

<画像2 肋骨認識像>



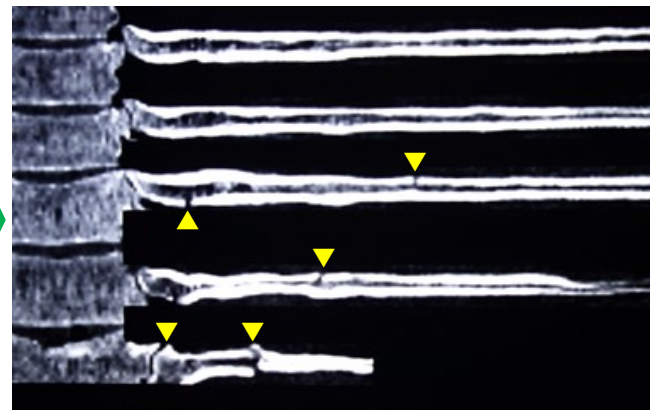
本機能によりAIを活用した肋骨の自動ラベリング表示が可能となります。

<画像3 展開像全体>



展開像は単画像表示で骨折部が明瞭化します。左背側の肋骨に多数の骨折が認められます。

<画像4 展開像 骨折部の拡大像>



これらの骨折部は拡大表示することも可能で印刷もできます。（上図 ▼▲）

これらは通常の胸部CT撮影後の画像処理のみで可能で、被曝を伴う追加撮像は不要です。依頼時に『肋骨展開』・『肋骨骨折の有無』・『パラレル肋骨レンジ』などと追記下さい。画像の階調調整が必要な場合もあり、ご不明な点は直接当院へお問い合わせ下さい。患者さんへの説明時や、胸痛の原因検索・胸部外傷後の評価に有用と思います。

今月には画像処理ワークステーションを導入し、心臓CT撮像も開始しました。これらの追加機能の有用性についても適時報告しますので、宜しくお願い致します。興味ある症例・診断に苦慮する症例があれば、まず当院へご紹介下さい。

文責：放射線科 金森修一

東大阪病院 地域連携部

直通TEL 06-6932-0369 直通FAX 06-6932-0086

東大阪病院 (代表)

大阪府大阪市城東区中央1丁目7-22

TEL:06(6939)1121 FAX:06(6939)1191